

# 新しい意味を生み出す リビングラボ

いまの社会システムでは、政策は行政が立案し、企業のサービスや製品は企業が開発し、研究は研究者が手がける。当然、どのような政策を立案するか、どのようなサービスや製品を開発するかは行政や企業が決める。だが、政策やサービス・製品、研究は、いずれも社会の仕組みを変え、ひいては市民やユーザーの人生を変えうるものである。それらを行政や企業だけが決め、市民やユーザーは、ただ「受け入れる」しかないのだろうか。そのような課題感から、近年、日本でも行政・企業・研究者・市民に関わらず「リビングラボ」（定義は後述）の取り組みが増えている。他方で、リビングラボの理念や実際の取組例、取り組みの効果などに対する理解は追いついていない部分もある。本号では、あらためて、リビングラボが生まれた背景や理念、効果等を説明しつつ、実際の取り組みについてまとめる。

## リビングラボの定義と特徴

リビングラボの包括的な定義は「製品・サービス企画や政策・活動企画の主体（企業・行政・NPO等の提供者）と生活者（利用者）が共に、生活者の実生活に近い場で、仮説の探索や解決策の検討・検証を実験的に行うための仕組み（環境及びプロセス）」<sup>1)</sup>とされている。

リビングラボの特徴は、仮説を現場で検証するのではなく、社会や生活者の暮らしの立ち位置で、社会的価値の仮説を探索すること（仮説探索型のアプローチ）、生活者が政策設計者や企画開発担当者と同じ立場で開発を進めること（生活者とのパートナーシップ）、相互に学習しながら変わること（関係者による相互学習）、実生活環境もしくはそれに近い環境で行うこと（実生活環境での活動）、社会の仕組みの一部であることを意識し、サービス単体ではなくコミュニティと一体

図表1 リビングラボの特徴

- 特徴1：仮説探索型のアプローチ
- 特徴2：生活者とのパートナーシップ
- 特徴3：関係者による相互学習
- 特徴4：実生活環境での活動
- 特徴5：コミュニティとの共創

資料）木村篤信「リビングラボと社会課題解決に向けた可能性」を元に筆者作成

的な活動として検討すること（コミュニティとの共創）、などがある（図表1）。

リビングラボはこれまで様々な文脈を経て形成されてきた学術分野であるため、それぞれの文脈で培われた要素が複雑に絡み合っている。そのため、時代の変遷に伴い少しずつ異なる形で定義され、リビングラボに取り組むことで求められる効果・成果も変わってきている。当初は、ユーザーや市民の参加を起点にした、「シチズンサイエンス<sup>2)</sup>」や「ユーザー中心設計」を前提としたオープンイノベーションの取り組みであった。これらは現在、人間中心設計という形で国際標準になっている。

また、暮らしの現場から収集したデータを起点にした取り組みの側面もある。これはIoTの発達やアジャイル開発手法<sup>3)</sup>の普及により、システム開発における標準的なアプローチとなった。リビングラボが注目された初期は実世界での適用可能性検証（テストベッド）用途で実施されることが多かったが、近年はテストベッドだけに取り組むのはリビングラボではないという論文もある。

## 価値によるリビングラボの分類

リビングラボに取り組むことで生み出される価値を考

1) 本誌掲載 (P.5) のレポート、木村篤信「リビングラボと社会課題解決に向けた可能性」による  
2) 職業科学者ではない一般の市民によって行われる科学的活動  
3) 状況の変化にすばやく対応し、「計画→設計→実装→テスト」といった開発工程を短いサイクルで繰り返すこと

えると、大きく3つに分類される（図表2）。一つは、セクターを超えて、今までにつながっていない人同士が共創をする「関係性を生み出すリビングラボ」、もう一つは、目的・問題に向かって取り組む「解決策を生み出すリビングラボ」、最後に、既存の問題構造を批判的にとらえて、「新しい目的（意味）を生み出すリビングラボ」である。プロジェクトを通じて意図する価値については、複数の要素を重ねて取り組む場合もあり、その3つは相互に影響する。

関係性を生み出すことで、解決策の幅が広がる。また、関係性が生まれ解決策の幅が広がることで、新しい目的が生まれ、解決を望んでいた問題が違う目線で捉えなおされることもある。目線が変わると、新しい次元の解決策が生まれる可能性が開かれる、といった価値が生まれる。

この流れを受けて現在のリビングラボで重視されているのは、市民を含めたマルチステークホルダーが共創をして、SDGsで目指されるような「ウェルビーイングやサステナブルな社会へのシステム転換」である。社会のシステム転換への方法論としてはリビングラボ以外の領域でも研究が増えているが、この社会の潮流を

踏まえて、近年のリビングラボに対しては「既存の問題構造を批判的に捉え、新しい目的（意味）を生み出す」点に期待がおかれている。

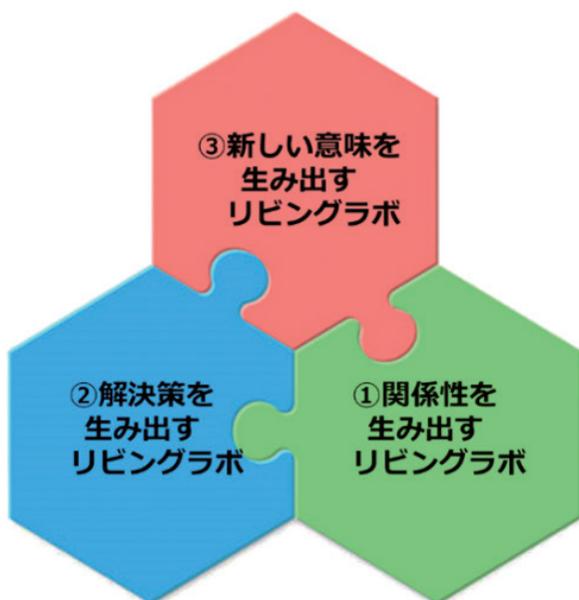
## 「新しい意味を生み出すリビングラボ」のあり方

現在のリビングラボ研究の流れを受けて、本号においては「新しい意味を生み出す」といった視点でリビングラボの価値やアプローチ、具体的な事例等を紹介している。

まず、木村篤信氏による「リビングラボと社会課題解決に向けた可能性」（P.5）では、リビングラボの概念やその意義、共創アプローチの重要性を説明する。リビングラボの目的・定義の変遷、日本での必要性や意義を整理し、社会システムの転換や新たな社会的価値を見出すためのアプローチのポイントなどをまとめている。

次に、事例紹介として、長島洋介氏に「先行事例にみるリビングラボの姿」（P.13）として、「みんなの

図表2 価値によるリビングラボの分類



### ①関係性を生み出す

- ・地域やテーマを基盤にセクターを超えて人同士が共創をし、関係性を生み出す
- ・コミュニティデザイン/コミュニティマネジメントと関連する領域

### ②解決策を生み出す

- ・目的・問題に向かって解決策を生み出す
- ・サービスデザインなどと関連する領域

### ③新しい意味を生み出す

- ・既存の問題構造を批判的に捉え、新しい目的（意味）を生み出す
- ・「意味のイノベーション」などと関連する領域

※複数の要素を重ねて取り組む場合もある

資料) 木村篤信「リビングラボと社会課題解決に向けた可能性」をもとに筆者作成

使いやすさラボ」(茨城県つくば市)、「鎌倉リビングラボ」(神奈川県鎌倉市)、「おやまちリビングラボ」(東京都世田谷区)の取り組みをご紹介いただいた。事例の特徴と活動の多様性、「リビングラボ」自体の効果と持続可能性がわかりやすく整理されている。特に、地域住民が主体となり「やりたいこと」を実現するプラットフォームが構築され、企業や行政とともに、暮らしに根ざした形での「暮らしの新しい意味」を模索する興味深い事例となっている。

なお、取り組みが「新しい意味を生み出すリビングラボ」へ発展するためには、長期的なリビングラボの共創プラットフォームを構築する必要もあることから、リビングラボの共創プラットフォームとしての側面をアセスメントするツール「リビングラボ曼荼羅」についても紹介している。

実際の取り組みのレポートとして、大牟田市でリビングラボを実践してきた(一社)大牟田未来共創センター(以下、「ポニポニ」大牟田市)の原口悠氏に、「大牟田リビングラボ」の5年間をふりかえる」(P.20)をご寄稿いただいた。大牟田市はかつての炭鉱/石炭化学コンビナートの隆盛とともに急激に繁栄したが、エネルギー政策転換のあおりを受け、人口減少と高齢化が進み、10万人以上の都市において全国で2番目に高い高齢化率となっている。町のあり方が変わり続ける同市の住民らは、長い間、認知症に対して「安心して徘徊できるまち」というコンセプトで活動をしていた。これは、認知症当事者の暮らしづらさの原因を疾病や本人の責任ではなく、社会との間にあるものとして考え「社会を変えていく」アプローチであった。このアプローチに魅せられた多様なメンバーが集まり2019年に設立されたポニポニは、「社会システムデザイン」をアプローチの基本におき、「地域経営」と「リビングラボ」を事業基盤としている。行政、企業、地域住民との協働を通じて、「長い間変わることなく維持されてきた社会システムが、時代や社会の変化に対応できなくなり、社会課題を生み出している」ことを認識し、その「システムエラー」を地域社会・地域経営を行う中から見出し、システム自体を再デザインすることに取り組んでい

る。例えば、有識者や先進的な実践者との対話から得られた視点をもとに企業が持ち込む課題を再設定し、「人の可能性を引き出す」アプローチを検討するといった手法である。

3つのレポートを通じて、リビングラボの理念を知っていただくとともに、新しい意味を見出すリビングラボの取り組み意義を感じていただけると幸いである。

原口 尚子 (調査研究部 主任研究員)